

THE A MUSEUM

Vol.10-1 第28号 2015.6.25

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore



館長あいさつ

本物の持つ力

歴史と民俗の博物館では、仏像や刀剣、絵巻物など、様々な資料（本物）を収集保存し、研究のうえ展示等で活用を図っています。

近年は、ネット社会が進み、資料の画像が気軽にパソコンで見ることができるようになりました。確かに資料の大体の印象や知識を得るためであれば、ネット画像で十分です。

しかし、輝き、質感、色合など、本物には本物の持つ力があり、時として見る人を圧倒し、しばし資料の前に釘付けになることもあります。言葉にできない感動。数日間続く感動の余韻。そうした経験がいくつも堆積し熟成されて来ると、ある時ふっと、「何か書いてみたい」などと創造の衝動に駆られることがあります。

皆様には、是非、博物館に来ていただき、本物の持つ力を味わい、こうした体験をしていただきたいと思います。

(館長 代島 常造)



特別展

戦国図鑑

クール

バサラ

スタイル

— Cool Basara Style —

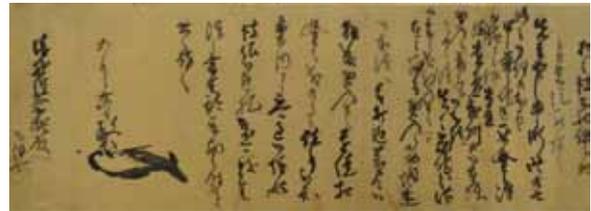
平成27年 7月18日土 ▶ 8月30日日



この夏、埼玉県立歴史と民俗の博物館では、一般社団法人日本甲冑武具研究保存会と、株式会社カプコンとの共催により、特別展「戦国図鑑 — Cool Basara Style —」を開催いたします。

戦国時代一。それは、伊達政宗、武田信玄、上杉謙信など、現在でも人々を魅了して止まない武将が活躍した群雄割拠の時代でした。武将たちは何を恐れず戦い、自らの運命を切り拓いた、まさに「^{バサラ}婆娑羅」であったといえるでしょう。

浅野長政をはじめとする武将がしたためた、埼玉県ゆかりの古文書なども紹介します。



伊達政宗書状（個人蔵、埼玉県立文書館寄託）

1 甲冑のあゆみ

日本の甲冑の歴史は、戦闘方法の移り変わりとともにありました。平安時代の末から南北朝時代にかけて、戦闘は武士が名乗り合った後に馬上で弓箭を射合う、いわゆる騎馬武者の一騎打ちによる方法がとられていました。一騎打ちに臨む上級武士は、大鎧と呼ばれる大型で重量のある武具を着用しました。その大鎧には美しさも追求されました。

しかし南北朝期から集団での打物（刀剣や槍等）による戦闘が増え、それに伴い武具はより着易く、動き易いものへ変わっていきます。その結果、大鎧は実戦の場には見られなくなりました。



いよざねもえぎいととしひょうひきあわせどうぐそく
伊予札萌黄糸綴両引合胴具足

（上杉景勝所用、個人蔵）

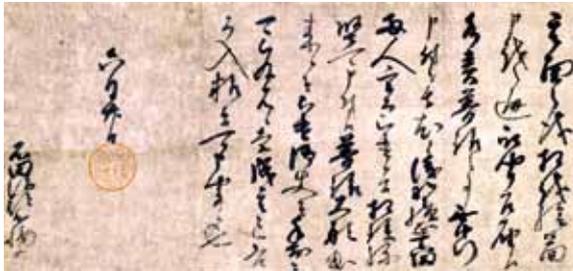
2 武将の群像～武蔵国と戦国武将～

戦国時代、埼玉県域を含む関東地方は、後北条氏による支配下にあります。後北条氏の勢力が埼玉県域内に及んだのは15世紀末からで、その後100年近くにわたり、同氏の強い影響を受けました。後北条氏と他国の武将との戦いが起きるたび、埼玉県域も戦場になりました。そのため、誰もが名を知る戦国武将も、この地とゆかりがあるのです。後に江戸に幕府を開く徳川家康はいうまでもなく、同氏と敵対していた上杉謙信や、さらに後北条氏と姻戚関係を結んだのち、同氏と対峙した武田信玄など様々です。

本展示では、武将たちと埼玉県との関わりを明らかにしつつ、戦国時代の終焉までを辿ります。また、武将たちが戦いに挑む出で立ちのほか、豊臣秀吉や

3 戦国時代の終焉

関東の戦国時代は、後北条氏支配の終焉によって幕引きとなります。その直接の引き金となったのが、天正18年(1590)、豊臣秀吉が関東平定のため行った小田原城攻めでした。その一端として知られるのが、秀吉の命を受けた石田三成が総大将となって行われた、忍城の水攻めです。しかし名城の誉れ高かった、忍城は陥落することなく、後北条氏の滅亡に伴って開城を迎えました。展示では、戦乱の世にあった関東が平和の世へ移りゆく一コマを、古文書などから紹介します。



豊臣秀吉朱印状 (当館蔵)

4 奇想・奇装・異装～変わり兜～

戦国時代になると、甲冑の形に大きな変化が訪れます。兜や甲冑を身につける武将たちは、自分たちの美意識や信仰心、縁起を担ぎ勝利を招き寄せる気持ちを甲冑に映し出したのです。その結果、自由闊達な形をとる兜が数多く制作されました。本展では、神仏や自然、動物などをかたどったバラエティに富んだ変わり兜が登場します。

5 そして、平和の世へ

長く続いた戦国時代が終焉を迎え、ついに泰平の世が訪れました。目立った戦の見られなかった江戸時代においても、武士は家の威儀や体面を保つため、武具を所持しました。また、先祖への畏敬の念から、武具を家の宝として伝えたのです。この時代、とりわけ懐古の念から復古調の名品が数多く作られました。そして古文書などからは、家が伝えてきた武具の保存や修理にも心を砕く様子も見られるのです。

6 戦国BASARA 墨絵で見る皇の世界

今回の展示では、人気のゲーム「戦国 BASARA 4」^{スメラギ}の世界が博物館に繰り広げられます。ゲームに登場する魅力あるキャラクターや、迫力ある騎馬像、ゲーム中に登場する武将をイメージした、墨絵アーティスト・西元祐貴^{にしもとゆうき}氏の描く迫力満点の直筆墨絵(原画)をお楽しみください。武将の墨絵の原画は本展が初公開となり、ゲームファンならずとも必見です。

また会期中は、展示に関連したイベントも盛りだくさん!

—この夏、あなたも埼玉で戦国時代を体感してみませんか?

(展示担当 関口真規子)

※関連事業は裏表紙に記載しています。

(右) 銀箔押鯨尾形兜 (個人蔵)

(左上) 金箔押桃形兜 (個人蔵)

(左下) 黒漆塗勝虫形兜 (個人蔵)



博物館 × 図書館のML連携で魅力アップ!

『ML』といっても、ファストフード店のドリンクのサイズのことではありません。聞きなれない用語かもしれませんが、Mは博物館 (Museum)、Lは図書館 (Library) のこと、ML連携とは博物館と図書館の連携のことです。ここに文書館 (Archives) のAが加わったMLAという連携もあり、近年はこれらの連携の重要性が認識されてきています。

当館でも、平成25年度から県立の各図書館と連携をして、主に広報協力や展示事業などを展開してきました。なかでも県立久喜図書館とは「夏休み子ども講座」等多くの連携事業を重ねてきました。何度か顔を合わせているうちに気心は知れてきます。そうなると話は早いもので「今度図書館以外でお話し会をやってみたい」「それじゃ、博物館の民俗展示室はどう?」「それ、いいかも」ということで担当レベルで話が進み、「博物館でおはなし会」は実現しました。連携もやはり「人のつながり」次第なのです。



「博物館でおはなし会」は3月21日(土)に当館で実施しました。当日は盛りだくさんのプログラム。まずは、屋外の体験学習コーナーで紙芝居を楽しみました。昔ながらの紙芝居屋さんよろしく自転車の荷台を舞台に司書さんの登場です。拍子木を打ち鳴らすと、子供たちが集まってきます。

すぐに紙芝居が始まるのかと思いきや、まずは会場に集まった子供たちを紙芝居に集中させるための手遊びから始まりました。簡単な手遊びに大人も夢

中。その雰囲気作りの巧みさは、私たち博物館の職員にとって今後大いに参考になるものでした。司書の方々と一緒に仕事をして感じたのは、常に子供に優しく、そして易しい言葉で対応するという。いつでも子供目線なのです。子ども読書推進担当の司書の皆さんに拍手です。



つぎに、会場を民俗展示室の囲炉裏端に移してのお話し会。司書の方々による語りに耳を傾けた後、学芸員がお話に出てくる羽釜やひょうたん、機織り機等の解説を少しだけ加えました。想像力をふくらませてお話を聞くことは大切なことです。そうしたあとで、実物の民具を間近に見ることができるのは博物館ならではのことであり、ML連携の魅力のひとつといえるでしょう。

「牛方とやまんば」「腰折れ雀」「瓜こひめこ」とお話は続きます。予想通り、展示室と昔話の雰囲気はぴったりと合って聞き手を惹きこみます。

お話のひとつ「瓜こひめこ」では、障子を隔ててのやり取りが子供たちを楽しませました。障子は日本の伝統的な建具でありながら、住宅事情の変化から急速にその姿は消えつつあります。そこで、最後に子供たちに障子に穴をあけて覗いてもらうことにしました。手本(?)どおりに指を舐めながら順番を待つ子供たちは興味津々。

それぞれ障子にあけた穴は小さかったけれど、そこからお話の世界が広がってくれたら“めでたしめでたし”なのです。

(主席学芸主幹 田中裕子)



祭り調査を終えて

『埼玉の夏祭り調査概報 I・II・III』刊行

当館では平成24年度から3年計画で無形民俗文化財調査として夏祭りを取り上げ、民俗担当学芸員による現地調査を実施しました。

夏場の炎天の下で汗だく、蚊と戦いながらの調査でした。昨年は突然の雷雨に見舞われ、傘をさしても猛烈な雨のために全身ずぶ濡れ、ようやく駅に辿り着きカメラの動作を確認して、ほっとしたのも束の間、送電線が切れて電車の運転再開の見込みなしとのアナウンスに途方に暮れたこともありました。

さて、県内には様々な夏祭りが伝えられています。今回の調査の対象としたのは、6月から8月までの3か月間に実施されるものです。ただし獅子舞は既に調査が実施されているものが多いため、今回の調査からは除きました。また、祭りの時期の大半が7月中旬から下旬に集中しているので、当館の民俗担当学芸員だけで調査するのは困難なため、次のような年度計画による地域分けをして実施しました。

平成24年度は北足立・南埼玉・北埼玉・北葛飾地区、25年度には入間・比企・大里地区、26年度は秩父・児玉地区の夏祭りから毎年15件ずつ特徴あるものを選定して調査しました。調査の結果は年度毎に『埼玉の夏祭り調査概報』として、1件の祭りを見開き頁で割り付け、名称、期日、場所、内容の項目で記録し、カラー写真で祭りの様子を紹介しました。

夏祭りの特徴は暑さや疫病、水難事故等から人々を守るために悪霊防御・悪霊送り・神送りなど、悪霊や疫病を除けたり送り出したりすることにあります。代表的なものとして「フセギ」「蛇祭り」ひやくまんべん「百万遍」だいはんにや「大般若」などが挙げられます。ここでどのような祭りが、フセギを例に紹介します。

フセギは「道切り」「辻切り」などともいい、村内に悪いものが入って来ないようにするために村境に注連縄などを張り渡すもので、県内全域で見ることができます。簡単で一般的なものに寺社で頂いたお札を竹に挟んで、村境に立てる方法があります。また、お札の他に様々な呪物じゆまつを吊るすことがあります。秩父地方では大きな穴開き草鞋わらじを吊るします。

その理由には、この村にこのような大きな草履を履くものがあると恐れをなして退散するとか、自分より強い一つ目の化物がいて思いこむからなどといわれています。

いずれにせよフセギにおいて、草履は欠くことのできない呪物です。草鞋の作り方を絶やさないために長瀬町長瀬上区の祭り関係者の方々は、行司と前行司が祭り当日と一緒に草鞋を製作することで、民俗技術の継承を行っています。



「荒神堂のお精進祭り」における行司と前行司による草鞋作り（長瀬町上区公会堂）

今回の調査では、他にも神前への奉納物を交換することで、霊力が授かるとする考え方を持つかま「鎌取替」とつかえ（加須市高柳）や「お諏訪さまのなすとつかえ」（狭山市入間川）など、珍しい祭りも多数記録しました。調査概報は県内の公共図書館に配布したので御一読いただき、県内に多様な夏祭りがあることを知っていただければ幸いです。またこれからもそれぞれの祭りが豊かな伝承をもって、地域の絆を深めながら受け継がれていくことを願っています。

最後に、調査に御協力いただきました祭り関係者の皆様、関係市町村教育委員会各位に厚くお礼申し上げます。

（主席学芸主幹 川上由美子）

縄文人のセンスにふれる～季節展示「土器の文様」～

縄文人は、何を考え、何をモデルに土器の文様を描いたのでしょうか。季節展示室では、「土器の文様」を開催しています。

縄文土器は、食物の調理を目的として、約 16000 年前から作られてきました。人々の生活に寄り添う中で、全国各地で集団特有の伝統や流行を示す文様や土器の形が出現していきます。文様は、主に縄を回転させることで付けられますが、縄の動かし方、表面の乾燥状態などで変化します。また、貝殻を使用したもの、棒や竹管を突き刺したり、引いたりしてつけた文様もみられます。これらを組み合わせたり、文様に区画を設けたりするなど、様々な工夫がみられます。

次に、展示内容について紹介します。

土器文様の展開写真

展開写真は、競馬の写真判定で使われるスリットカメラを使用して撮られた写真です。写真家の小川忠博氏が撮影した展開写真は、美術的な作品としてだけでなく、縄文土器研究の資料として学術的にも活用されています。

展示している写真パネルは、埼玉県内の遺跡から出土した土器の展開写真です。縄文時代前期の単純な縄を転がした文様から、中期の豪華な文様、そしてシンプルでも繊細な後期・晩期の文様を紹介しています。

精進場遺跡出土品

精進場遺跡は、武蔵野線東川口駅の南方 100 m に位置する遺跡です。1965 年に駅周辺の開発や宅地造成により発見され、1966 年に川口市立川口女子高等学校の生徒たちによって、夏休み期間中に緊急調査が行われました。現在の発掘調査は、主に公共団体や民間組織によって行われますが、当時は、高校生や小学生が主体となっていくことも少なくなかったようです。遺跡からは、当時の人々の廃棄の痕跡である貝塚が確認されていますが、住居跡は発見されませんでした。

展示は、縄文時代晩期おおぼらの大洞系の注口土器と壺です。いずれも保存状態は良好で、全体の文様を見ることができます。

大洞系の文様は、縄目を消すことで文様をつけるすりけし擦消縄文の手法が採用されます。文様の構成も繊細で、土器の表面は黒く磨きあげられる特徴があります。注口土器は、お酒などの液体を入れ、注ぐための容器と考えられています。その多くは、デザインが豊かで見た目にも美しいものばかりです。特別な場面や場所で使われたため、その場にふさわしいデザインが用いられたのでしょうか。

稲村坦元コレクション

稲村坦元 (1893～1988) は、郷土史研究家・仏教史学者として知られます。昭和 3 年 (1928) の『埼玉県史』編纂に携わるなど、埼玉県の郷土史研究や文化財保護に大きな功績を残しました。稲村コレクションは、武蔵国分寺をはじめとした古代瓦の拓本が著名ですが、縄文土器や弥生土器なども含まれています。拓本は、古く中国の唐代から伝わる文字や文様を写し取る手法です。このコーナーでは、写真や実物とは異なる文様の表情を展示しています。

縄文時代には、多くの謎があります。展示を通し、まずは、文様の謎について、想像を巡らしてみたいかがででしょうか。この他、季節展示室では、「文化財を守る子どもたち」を上映中です。小学生達が古墳の測量や貝塚の調査を行う様子が記録されており、当時の子供たちが文化財に向き合う姿を知ることができます。

(展示担当 宮原正樹)



展開風景

藍色にみる文化

藍染は『蓼藍』と呼ばれる植物を原料とした染色法です。埼玉県では江戸時代から明治時代にかけて広く栽培され、糸染めや型染めが盛んに行われました。現在でも、浴衣の生地や剣道の道着、お祭りの際に身につける半被など、私たちが目にする機会は多くあります。

ここでは、県内における藍染について触れていきたいと思います。

藍染は、江戸時代の中頃、主に農家の副業として県内で盛んに行われていました。

染め工程の際の水洗いは勿論、蓼藍の生産農家では水やりの為、大量の水が必要であり、県内に利根川・荒川など豊かな水量の川があることは藍染の発達につながっていきました。

県内の本庄市・深谷市・羽生市（県北地域）では糸の段階で染める「糸染め」、八潮市・三郷市・草加市・越谷市・川口市（県南地域）では、浴衣地などに型付けした後に布を染める「型染め」の染色法が行われています。

藍染の職人達は、型場や染場に『愛染明王』を仕事の守り神としてお祀りし、「愛染講」を組織しています。熊谷市下川上の愛染様や、東京都板橋区の日曜寺の愛染様に参詣しています。毎月26日は『愛染様の日』といって、正月・5月・9月の26日は愛染明王の掛け軸を掛け、一同で御神酒を頂いてお祝いをします。

何故、愛染様をお祀りするのでしょうか。

それは、「藍染」と「愛染明王」の発音が似ている事、そして愛染明王が色を司る神様である事が由来しています。愛染の意味として、「ものごとく愛着し、それに執られて染まる心」・明王が全てのものに色彩を与える力を持つことなどから、「染色」に関連づけられた、とも考えられています。さらに、愛染明王の蓮台下の宝瓶を「藍甕」に見立てた事からも信仰を集めました。現在も、熊谷市の愛染堂や板橋区の日曜寺では職人の親方衆が、正月の26日に集まり、縁日や講

が行われています。

当館の、ものづくり工房では、藍染ハンカチ作りや、特別メニューの風呂敷作り、ストール作りなど行っており、多くの来館者が体験を楽しみ、藍染の文化に親しんでいます。以前、工房にみえた海外旅行者から、藍染について質問を受けました。藍染体験の詳細や、藍染の原料や作成方法、工場の場合などを説明しましたが、同時にその方が、自分の家に合う藍染の暖簾やテーブルクロスを探している事も知りました。

明治23年、日本を訪れたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、「青い屋根の小さな家、青い暖簾を吊した小さな店頭、青い着物を着てにこにこ笑っている小さな人たち」「一般の人が着ている着物地は、紺色を大部分を占めているが、その紺色がまた、町家、町家（のれん）の色をも支配している」と日本の第一印象を自らの著書に記しています。現在、「Japan Blue（ジャパンプルー）」と聞くと、サッカー日本代表を連想されるかと思えます。実は、明治初期のお雇い外国人で、醸造学や染料学などを専門とした科学者ロバート・アトキンソンの命名した藍の呼び方です。

『藍』が作り出す色彩の奥深さ・美しさの魅力は、昔も今も日本に留まらず、海外を魅了し続けています。

（学習支援担当 川崎 友梨）



左：愛染明王図（相澤染工HP）

上：奉納額写真（日曜寺・手水所）

THE A MUSEUM



歴史と民俗の博物館イベント情報(7月～9月)



埼玉県のマスコット
コマン

■特別展「戦国図鑑－Cool Basara Style－」を、7月18日(土)～8月30日(日)まで開催します。

7月

- 4日(土) 歴史民俗講座、博物館裏方探検隊
- 11日(土) 博物館裏方探検隊
- 18日(土) 特別展「戦国図鑑－Cool Basara Style－」
オープン
博物館裏方探検隊
- 19日(日) 甲冑シンポジウム
- 20日(月) 特別展展示解説
- 25日(土) ジュニア講座、博物館裏方探検隊

8月

- 1日(土) 博物館裏方探検隊
- 2日(日) 甲冑の着装実演、特別展展示解説
- 8日(土) 歴史民俗講座、博物館裏方探検隊
- 15日(土) 特別展展示解説、博物館裏方探検隊
- 21日(金) 甲冑着装体験
- 22日(土) 甲冑着装体験、特別展展示解説
博物館裏方探検隊
- 23日(日) 夏休み映画会

8月

- 29日(土) 博物館裏方探検隊
- 30日(日) 特別展展示解説

9月

- 5日(土) 博物館裏方探検隊
- 8日(火) 館有コレクション「うちわ」オープン
- 12日(土) 博物館裏方探検隊
- 15日(火) 三十六歌仙額公開
- 19日(土) 博物館裏方探検隊
- 26日(土) 博物館裏方探検隊

イベントは事情により変更になる場合があります。
また、事前に申込みが必要なものもありますので、
詳細はお問い合わせください。

65歳以上の方の観覧料につきましては、条例改正により、平成25年7月1日から一般の方と同額になりました。御理解のほどよろしく申し上げます。

◆博物館への資料寄贈をお考えの方へ◆

まずお電話で御一報ください。TEL:048-645-8171(資料調査・活用担当)
詳しくはホームページを御覧ください。http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/?page_id=261



特別展 **慈光寺** 国宝法華経一品経を守り伝える古刹
平成27年10月10日(土)～11月23日(月/祝)



交通機関
東武アーバンパークライン(野田線)
大宮公園駅下車徒歩5分

埼玉県立
歴史と民俗の博物館
Saitama Prefectural Museum of History and Folklore (編集発行)

〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町4丁目219番地
TEL. 048-641-0890 (管理)
048-645-8171 (学芸)
FAX. 048-640-1964
<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



埼玉県立歴史と民俗の博物館だより
Vol.10-1 (通巻)第28号
2015年6月25日発行